



大倭出版局・大倭紫陽花邑

平成14年
4月号

毎月23日発行
通巻380号

(題字 矢追日聖)

★発行日 平成14年4月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良県大倭町1の12
(0742)44-0015
★印刷 大倭印刷
★定価 1部 250円
年間購読料3,000円(送料共)
★振替口座 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



八重桜の花びら 弘前市 石田勝利さん撮影 (文・5頁)

平成13年11月11日 大倭会文化講演会 於：大倭大本宮拝殿

アニミズムの世界 — 沖縄・龍神・・・ (1)

— 故山尾三省さんを偲びつつ —

講師 野本三吉氏

中西正和大倭会会長の挨拶

大倭会というのは何をするとところか、と皆さん思っておられるでしょう。ただ矢追日聖法主様が好きで、おっしゃることが気に入ったという者が集まって細々とやっているというだけで、こんな宗教団体でも何でもありません。

「アニミズム」ってどういうことや、と聞きますと、「山川草木全てのものに命があるということ」やそうです。それなら法主さんがおっしゃることと同じや。こんなこと勉強なされる先生いてはるんやなど、今日は非常に期待をもって来しております。

この拝殿かて、別に大倭教が建てたものとはが違います。そこに前の拝殿の写真が掛かってますが、掘って建て小屋です。狭いし雨漏りしそうなガタガタやし、法主さんの喜寿のお祝いにさしてもろたらどうやろという話になった時、法主さんも、みんなの役に立つような建物やったらかまへんと言われて建ったものなんです。

そんなことで、どうぞ皆さん、今日は一日ゆっくりと遊んでいって頂きたいと思えます。

山尾三省さんのこと

今日、ぼくは作務衣姿で来ました。家で仕事をしている時、いつもこの格好なんです。つれあいが、汚れているし洗濯もしていないからダメと言ったんです。

が(笑)、そのままが何だかいいみたいなきががして着てきたんですね。

一年前ここで開かれた「賑栄い塾」で、山尾三省さん、真木悠介さん、岸田哲さん、阿木幸男さん、そして私と五人、それからたくさんの方々とお話をしました。

今日は三省さんのことを話しますが、ぼくは、その時、三省さんから教えて頂いたことで、少しずつ実行できるようになったことが一つだけあります。それは、「自分が本当にやりたいことをやるう、自分が行きたい所に行こう」と決めたことです。ただ、行けないこともやれないことも実際にはあります。そしたらそのことをずっと思い続けていよう。そうすると必ず実現できる、というふうにも思うように、あるいはやるようにしました。それは逆に言いますと、自分がしたくないことは、やらないでおこうということです。これはけっこう難しいので、時々やりたくないのだけれど、引き受けてしまうこともあって、後で必ずしつべ返しを受けまして、いろんな失敗をすることになります。今日のこの格好というのは、恥ずかしいなという気持ちも半分あったのですけれど、一番自分が自分らしくいられる格好で行きたいと思ったわけです。

今日のテーマの「アニミズム」というのは、この話の中で直接、説明ができないと思いますので、これから話をするの中で、こんなふうなことかなと、それぞれの人が掴んでいただければと思っています。

前回の賑栄い塾で、三省さんがすぐ横にいらして並んでしゃべることがありました。

ちよつと、これも言っておきますね。山尾三省さんは、三という字に反省の省なんです(反省

の省かどうか分からないけど)。ぼくはペンネームではありますが三吉、三つの吉なんです。そして、三省さんのお連れ合いは春美さんとおっしゃるんですね。私の連れ合いも晴美というのです。これは一体どういうことになるんだろうと思っていました(笑)。

三省さんは亡くなる時に三つの遺言をされましたが(この話はまた一番最後にします)、ぼくは、三省さんが亡くなったという知らせを岸田さんからもらってから、ずっと語呂合わせのように三つの吉について考えていました。三つの吉だから素晴らしい事が三つ起こってくる、あるいはあると。それはどこにあるのだろうと思っていたら、「野本」に答えが隠れていました。「……の●も●」なんです。その、「も●」を探さなければいけない、それがぼくの仕事だろうというふうに勝手に考えているわけです。

それで三省さんがぼくの隣におられて、ぼくは沖繩の話をしたんです。だんだん沖繩に慣れてきた時に、巫女さん達が、「ああ三吉さんも、自然が来たね、自然持っているね」と言ってくれたんですよ」と話したんです。三省さんは「いい言葉ですね」とおっしゃった。そしたら真木悠介さんもおっしゃって来られて「あの言葉がびんときました」と言われた。ぼくはごく普通に思っていた知らないうちに使っていましたけれど、「自然が来たね」とか、「自然持っているね」というのは大事なことなんだなと思つて、このことをもう少し大事に考えようと思つたんです。

去年は、命というものを考えようという集まりだったんです。ぼくは、土だとか石だとか水だとかそういうものも命を持っているんじゃないか、ということをごく自然に言つたんです。すると三省さんが「今の人はそういうことを言わない。鉱

物とか石とかは命を持っていない、意思も持っていない、心もないと言う。しかしそれも命を持っているんですね」と言われたんです。

今回、この話を中心にしようと思つたので、三省さんの本を片っ端から読みました。本の中にも書いてありましたが、その時にこう言われたんです。「人間はどんな離陸をしていく。もつと高いもの、すばらしいものを求めて、どんな離陸する、出発する思想を持つようになつてしまつて、どこに着陸するかという、大事な着陸点の思想を失つてしまつた」という話をなされたんです。

どこに着陸するか。命を持っているものは全部、私達も含めて最後は、土になつたり石になつたり空気になつたり水になつたりする。そこに着陸点だというのが、命を持っているということですね。そのことを三省さんは、本当に生き方そのもので言っていたんじゃないかという感じがしています。土や石や木、それらはみんな意思を持っています、そこを交流できる、話し合うことができる、感じ合うことができる。そういうことを、あの時教えてもらったなあと思つたんです。

その時に三省さんが読んでくれた詩がありました、これが忘れられないんです。

心 山尾三省

心が濃くなると魂になる

魂が濃くなると霊になる

霊が深まると神になる

神が開けると仏になる

仏とはいのち

いのちが濃くなると心になる

心から始まつてずっと今言つたいろんなものが循環をしているということをこの詩の中で言われ

たと思うんです。このことに気づかされた時に、今生きている状況がものすごく変わって見えてくる、感じてくると思いました。

賑栄い塾の最後の日に、三省さんがこういう話をされたんです。

「はじめ青山日元さんのお話があつて、その感動の後で杉本順一さんの話を聞いて、突然もう涙があふれてしょうがなくなつたんですね。どういふことが分らないんですけれど……」

今ぼくは、宗教性の恢復ということをですね、人間性の自然としての宗教というものを恢復していかないとダメだということを強く感じて、そういう発言をしている最中なんです。杉本さんは、宗教は信じてはダメやで、「と法主さんに言われた」ということです。ダメなんです。信じたら……。信じるような宗教はダメなんだ。事実なんです。事実として私達の中にあるということです。真木さんの言葉でいえば、「存在する」ということです。それが宗教性なんです。存在しているという事実。本当にもう涙が止まりません。ありがとうございます」

これを聞きながらもぼくは涙が止まりませんでした。何が自分に伝わってきているのか分からなかつたんですが猛烈に涙が出て止まらなかつた。

沖繩へ行くまでのこと

今日ぼくはこれから、その時のことが、何だったのかを一緒に解き明かしてみたいと思つて話をします。普段はなかなかこのことをしゃべれないことが多いのですが、なんだか今日はしゃべれそうなのがしています。事実在即して話そうと思つておかしかつたら、変だなと思つて下さい。

一九六九年、今から三十二年前、ぼくはナップザック一つ背負つて日本中を放浪して歩いていました。二十七か二十八歳の青年でした。北海道からずつと南下して歩いていたんですが、その時たまたま東京の山谷という所にいました。大阪の釜ヶ崎と同じような有名なドヤ街です。そこでぼくは日雇い労働をしていました。朝早く五時くらいに起きて土建現場に行つて、ものを作つたり壊したりしていたんです。一日働くと八千円とか九千円のお金をもらつて、それでものを食べたたり、部屋をとつて泊まつたり、そういう生活をしていました。仲間達もたくさんいて毎日が楽しかつた。

ある時、部屋に帰つてきて、夜になり寝たんです。非常にリアルなんです。それが地震の夢でした。非常にリアルなんです。そしてぼくは、空中に浮かんでいるようなところにいましてね。東京かどこか都会がガタガタ揺れはじめて、崩れたりするわけです。倒れたものの下敷きになつて苦しんでいる人もいるし、たいへんなことだと思つて、はつと目が覚めると午前二時十五分。時間はとってもよく覚えてる。汗をびっしょりかいていました。翌日また仕事に行つて働いて帰つてくる。ご飯を食べて夜になり寝ます。そうするとまた夢を見るんですね。この夢が日を追うごとに、どんどんどんどん具体的になつてくる。非常に恐くなりました。

そしてこの夢は一週間見るんです。どんどんリアルになつてきました。初め、おもちゃのような都会が壊れているんだと思つたら、上を見ますと空がかさぶたみたいに凝り固まつて、岩みたいにごろごろになつて、それがぶつかり合つて落ちてくる。もうすごいんですね。蟻みたいな人達が逃げまわつている。音がキーン、グイーンと、もう何というか、こすれあう音です。ぼくはもう

ワーツと飛び起るんですが、これが不思議に二時十五分。

終わりの方になると、国会議事堂が出てきました。これはもう間違ひなく東京です。それがプリンみたいに揺れる。そしてポキッと折れる。本日の国会議事堂はそんなに背が高くないんですけど、これは高いんです。この間の世界貿易センターみたいな感じでひよるひよるしている。それがポキッと折れて、スローモーション映画のようにして大地に突き刺さる。その下に女の人がいる。女の人のお腹や胸のところに刺さる。何と、その人が朝鮮人の服であるチヨゴリを着ている。ぼくはどこかで見たことがあるような気がするんですが、今もつて分かりません。その女の人がこつちをじつと見て「あなた達忘れたね。あの日のことを忘れたね」と言うんです。ぼく自身は指差されていないような気がしましたが、びつくりして目が覚める。

これは地震が起こるんだと思つて、ぼくは、御茶の水駅の前に立つて「東京に地震が起きる！ 皆さん逃げましょう！」と一週間くらい言い続けました（笑）。今ではもう信じられない話で、よくできたと思いますが。鶴見俊輔さんとか長野秀人さんとかいろいろな知り合いの方が心配して見に来られて（笑）、鶴見さんは「大丈夫だ、まともだよ」と言われたそうですが。

最後の夢は総天然色なんです。そして地震の夢の後に、ものすごいきれいな海が出てくるんです。ぼくが見たこともないようなきれいな海です。そこに太陽が昇つていく。真っ青になつたり緑色になつたり、何とも言えないきれいな海です。そこにぼくは潜つたり上がつたりしているんです。どこだろうと思つたのですが、沖繩しかない。ぼくは体験の中で大学時代に沖繩に行つたことがあり



まして、きれいなさんご礁や海を見ていましたからすぐ沖縄が浮かんできた。沖縄に行きたいなというか、沖縄に何があるのだろうと思いました。ぼくはその時、岸田さんたちと一緒に日本協同体協会（通称キブツ協会）に関わっていました。イスラエルのキブツという集団農場に研究生を派遣している団体で、岸田さんはもう何年もイスラエルに行ったり来たりされていた。

そこに神田孝一という不思議な人がいました。この方は神道研究者で、しかも読売新聞の記者でもありました。石原莞爾という將軍のそばにずっとついて、記事を書いていました。石原莞爾という人は『最終戦争論』を書いた方ですが、この方もいろんなことを感じたり、また見えたりしたらいいんですね。その影響も受けて、神田さんは独自に神道の勉強をずっとやっていらして、キブツ協会の雑誌『月刊キブツ』に原稿を書いておられました。断食のことや、日本とはいったい何かということをずっと書いておられた。

その方に話を聞きに行きました。すると「沖縄にぜひ行つたらいい。昔ながらの岩戸開きをやっている。古神道のなごりをもっているグループがいる。そこに行つたらいいだろう」と教えてくれた。何だか分かりませんが、たけれど、ぼくは沖縄に行くことにしました。沖縄という言葉

琉球というのは、ぼくにはどうも龍宮（リュウグウ）に思えてならない。龍宮城、日本から言えばニライカナイ、遠いところにある理想郷みたいなところに行けるのではないかという思いがあった。ぜひ行きたいなと思いました。しかし同時に、大地震の夢を見ていましたから、沖縄に行っている間に日本が壊れてしまうのではないかと、思っていた。でも、その事を言ってしまうと、本当に起こりそうな気がして恐くて言えない。

そして船に乗って沖縄に出発するんです。昔ぼくは『いのちの群れ』という本を出したんです。今もう出版社に二、三冊しかないといいので急遽送ってもらったのですが、これは、またいつか出せればと思っています。その本の中に、その旅立ちの日のことを書いたところがあるので読みます。

二月のはじめ、ぼくは晴海埠頭から東京丸に乗込み、沖縄へ旅立った。あ、またハルミが出てきましたね（笑）。スクリーナーが白い泡を立て、蛍の光のものらしい音楽が流れると、船体は静かに岸壁を離れる。色とりどりのテープが飛び交い、なごりを惜しむ人々の声が重なりあう。船による旅立ちちは、妙に甘ずっぱい感傷をひき起こすものだ。

やがて東京丸は、白い波をけたてて、大海原へ

大倭会へのおさそい

- (目的) 第3条 この会は、大倭紫陽花邑の基である「みんな仲良く」を基本に、相互扶助の社会の実現を願って行動すると共に、会員相互の親睦をはかります。
- (事業) 第4条 この会は、前条の目的を達成するため次の事業を行います。
- (1) 研修会、講演会などを開催します。
 - (2) 機関紙、パンフレットなどを刊行します。
 - (3) 社会福祉事業、医療事業、教育事業、国際文化交流事業など公益事業を推進、援助します。
 - (4) その他必要な事業を行います。
- (会費) 第10条 この会の会費は、年額（4月～翌年3月迄）とし、次の通りとします。
- 年会費 10,000円

と乗り出し、進路を沖縄に向けて速力を増しはじめる。気の遠くなるようなかなたに見える水平線。青い海。潮風を受けてぼくは大きく息をすい込む。東京大地震の幻想を抱いて、あちこちとかけ歩いてきた、ついきのうまでのことがぼくの中であわただしくよみがえってくる。

あれはやはり、幻想であったのだろうか。いや、東京は必ず崩壊する。それは、おそらく間違いないのだ。

しかし今、ぼくにとって重大なのは、その後によみがえってくる新しい文明の原形だった。

という書き出しでした。

そしてぼくは沖縄に着いて、神田孝一さんが紹介してくれた比嘉鉄工所に向かって行くことになるんです。

(続く)

大倭会 郵便振替 01060-6-31705
 ※『おおやまと』の購読だけを希望される場合は3千円
 郵便振替 01050-6-67002

こもれる魂魄の地をたずねて(八)

番外編「どうして、僕が」の巻

青森県弘前市 石田勝利

忘れもしない小学三年の秋、突然「私は一体誰なんだろう？なぜ自分はここに居るのだろうか？何の為に生まれてきたのだろうか？」と、私という自分に疑問を抱き始めた。漠然とした問題だけに、誰に、何を聞いたら教えてくれるのかさえ分からず、一人悶々と悩んだ頃を鮮明に憶えている。

数年後、溺死した友人二人の、青白く硬直した姿と、火葬される光景を目にしてからは、死への恐怖に追われるようになった。いつかは自分もあのようになるんだ。明日かも、十年後・二十年後か必ず焼かれるんだと思うと、いつそのこと生まれてこなければと、後悔にも似た念に囚われた。

中学の頃から一変して、逆に調べてやろうと思いはじめた。仏壇を死者の隠れ場所ではと調べ、神棚の扉を覗き、寺の骨壺を次々と開いては坊さんに叱られもした。神様・仏様も根負けしたのかご褒美なのか知らないけれど、今でいう超常現象を見せ始めた。もう一つの世界から教師が派遣されて来たようだ。小学三年の疑問の糸口が見つかったのだ。この世とあの世との、からくりが解け始め、自分を探し、歩き求めて、もう四十年を経た。その中で、面白いのと苦しいのとエピソードを二つ紹介します。

行方不明の我が家の過去帳を探して二年目を迎える頃、私共一家三人は、弘前のシンボルでもある「弘前五重の塔」の真下の一軒家に、安く入居した。今まで住んでいた人の気が知れないと思う程、誰でも感じそうな霊気が漂っていた。事件はすぐ起きた。二歳になる息子に遊び友達が出来た。朝昼晩と遊び回っては何やら話している。

その様子を私としては素直には喜べない。何しろ相手が悪い。四百年前の戦国時代末期のお姫様とその乳母の亡霊二人なのだ。最初は黙認していたが、日々エスカレートして、親との生活より多くなった。幽霊は夜と決まっているのに朝早くからズーツとである。いつ眠っているのだろうか。どっちが親か、親権問題でもある。

寺の住職に苦情の談判に行った。住職曰く「まだ出てますかあ。困ったもんです、本人達は生きると思ってるんですよ。悪気があつてのことではないので、こっちに帰るように叱って下さい。でもお宅の家の一部は、寺の境内を削って建てて境界を破っているのですヨ。家宅侵入はあなたの方なのですヨ」。私も「実はあの二人、サーピス精神旺盛で、暗い家に着くや待っていたように玄関の明かりが灯るのです。夜中の階段の照明なんかも落ちるのを案じてのことだと思えます。息子の子守りも無給でやってくれます。それに嫉妬した私こそ恥ずかしい。知人友人が幽霊見物に来て、観光名所にして大儲けも夢じゃないと言っているので真剣に考えてもいたのです」なんて話して、その住職とは仲良くなった。

ある時、私が過去帳を探している話をする、すぐに「これは不思議なもんです。当方の寺に納まっています。私の二代前の住職です。昔は今と違って輪番制でしたので、その時の過去帳も持って来たのでしよう。墓も歴代住職に並べて有ります」と言う。過去帳どころか墓まで見つけられた。二人の霊が縁を結んでくれて、一件落着。

タイ国に五度、小乗仏教をたずねて旅をした。

一度目に、チョツとしたトラブルで生と死の境界を往復することとなった。異国の地で一人、死を覚悟して部屋にいた。意識が遠のくのに、一方では異常な程、冴えてくるのが感じられる。聴覚も

二十倍、三十倍と増幅してゆく。体中苦しく声も出ない、息をするのがやっと。周りからは「生きる」「死ぬ」の大声だけが聴こえた。突然、苦しみから解放されてフワリと浮いたと感じたその時、ドームの真中に立たされていた。目の前には、何十個という巨大テレビの画面が並んでいる。よく見ると、小学校に入学した時に見た校門に入っていく私であった。その隣は中学二年の三月四日、数学の方程式が何ページ何行目まで映っている。あつちは高校二年の〇月〇日と、自分のこれまでも全部映っている。全画面が同時に見え、聞こえ理解できる。潜在意識に蓄積された想念が一挙に公開されていた。これは凄い、元の体に戻ってメモに記した。苦しいがこのチャンス逃してなるものかと、又、あつちへ行つて確認して戻つては記した。私の知らない父の幼少の頃と、明治三十七年の祖父の兄を見たいと思つた。すると薄汚れた着物で川の端を小石を手に走る六歳の父と、軍艦の甲板で双眼鏡を肩に立つ将校姿の祖父の兄の映像を見せてくれた。

延々七時間にも及ぶ、まさに命がけの体験でした。

表紙写真について

桜にも旬がある。上旬、中旬、下旬と一句は十日間になる。桜祭が終わった頃から、八重桜が咲き誇るのだが、花見客はいない。勿体ない話である。桜がヒラヒラ、パラパラと散つては跡を残さないのに、八重桜は花株ごとポトリ、ポトリと美しいまま落ちる。まだ香りの余韻を保ちながら。

「だまことだま

二つの戦争が

私にもたらしたもの

新潟県佐渡郡 大滝 哲也

昨年の「寸草」の取材の折、編集部から何か書いてほしいと言われていたので、本当はもつと楽しいことを書こうと思っていました。しかし、昨年九月の同時多発テロ事件の衝撃から、私の身に起こった出来事を書こうと思います。

友達のお母さんは私に嘘をついたりしないのに、何で私の母は自分を良く見せるために息子の私にまで嘘をつくのかと、以前から疑問に思っていました。また、母はまだ小学校にも入っていない私をバイオリンの教室に通わせましたが、先生が厳しかったので、そのたびに泣いていたことを今でも覚えています。

幼い頃に病気で自分の母と姉を亡くし、その後戦争で父と兄に死なれ、養女として親戚に引き取られた私の母は、学校では「もらわれっ子」と呼ばれて悔しい思いをしたそうです。持つて生まれた母の性格がそうさせているのかも知れませんが、孤児となり肉親からの愛を満足に受けられず、学校でもひどいことを言われたりしたので「自分を良く見せたい」と思うのは無理もないことだと思います。息子の私を戦死した自分の父のような音楽家にさせたかったという母の夢を、今でこそ少しでもかなえて上げたいと思えます。しかし幼なかつた当時の私にとって、この世で一番信じていたはずの母親は、気が付いたときには常に本心を探らなければならぬ人になっていました。

報道関係の会社で働いていた父の転勤で、一九七二年夏から二年半余り、私達家族も中東はレバノンの首都ベイルートで過ごしました。

一九七五年三月、何度目かの中東戦争で街には戒厳令が布かれ、私と妹が通っていた日本人学校も休校になりました。以前から小競り合いがあつたので、飛来する戦闘機の音には慣れていました。が、そのときはいつもと違う音でした。よく晴れた日の朝のことだつたと思います。ゴーツという音に交じって急降下するときの音が耳を劈く大音量で、しかも急激に近付いて来ました。何事かと思ひ、当時中学一年生だつた私は慌てて住んでいたビルのベランダに飛び出しました。

そのとき大地の底から上下に揺さ振られるような振動で足がふらつきそうになりました。それは間をおかず四回あつたと思います。しばらくしてから、空港近くの難民キャンプが爆撃にあつたというのを父から聞かされました。距離にして私達が住んでいるビルから約八kmのところでした。

電気も水道も満足にない生活を余儀なくされているパレスチナ難民。その家を失つた人の群れに追い打ちを掛けるように爆弾を落としていく、文明の技術を結集して作られた軍用機。その爆撃の理由は、「テロに対する報復」でした。アラブゲリラがそこで養成されているという疑いがあつたからです。

文明とは、何のためにあるのかと私は疑問を持つと同時に、映画の愛とロマンを描いたようなことは、この世のものではなく、この殺戮の方が現実だと思ふようになりました。

父の任期が切れたので、戦争が激化する前に家族四人揃って帰国し、東京に住みました。四月から学校に行き始めましたが、詰め襟の制服と帽子

になぜか物凄く嫌悪感があつたことを覚えています。また、この公立の中学校は優秀で校区外から越境してくる生徒もいたほどでしたが、私は高校に進学する気はまるで無かつたので、授業には故意にうっかりかなくなりました。クラスでも大抵似たような感じの連中と私は意気投合しました。

それからの一年間よくまあ、あんなにたくさん悪いことが出来たなと思います。その主な動機は、汚いことを隠し綺麗事ばかり押し付ける「親と学校に対する憤り」だつたように思います。学校で何か事件が起きると必ず私が真っ先に呼び出されていました。事実大概私が関わっていたので、それは間違いではありませんでした。

父兄も来ている文化祭で、仲間五人と商店街で万引きしてきた酒類を飲み、大暴れした首謀者の私ともう一人が急性アルコール中毒で死にそうになりました。これはこの学校始まって以来の事件ということで後日親は呼び出され、臨時生徒総会が開かれ、私が破壊した窓ガラス等の器物を修復するための巨額の請求書が家に回つて来ました。親にしてみれば突然のことでもかなりショックだつたようです。うちの子が不良になつたのは友達「のせいだ」と、私の親は春休みの間に神奈川県のK市に転居することになりました。この世で唯一信じられる友人達を、私から引き離すために。

転校した先の学校は不良の影すらなく平和そのものだつたし、行けばどうせまたメチャクチャにしてしまうのだろうと思ひ、最初の一週間だけでバタツと行かなくなりしました。これからの私にとって本当の苦しみの始まりでした。まだ「登校拒否」だとか「引きこもり」なんていう言葉がなかつた頃です。信じられる人間が回りにいなくなつたのを切っ掛けに、人間そのものが嫌になり、人の顔を見れなくなりしました。母と口喧嘩すると

き以外、家族とは一言も口をきかず、家の前を走る自動車の音や人の話し声を聞くのすら厭になり、その時だけ耳を塞いでいました。

辛い三年間でしたが、自転車でも山を越え海に泳ぎに行ったり、人間が嫌いになったわりには、小説から哲学や宗教の本に至るまで、片っ端から読みあさりました。FM放送で様々な音楽を聴き、作曲をするようになったのもこの頃からです。

母は私を児童相談所から果ては病院の神経科、精神科まで連れて回ってくれましたが、どこへ行っても、最後にはもう来なくていいとか治療の必要はないと言われました。これは、普通ではないけど病気ではないので治療されず、このまま家で一生を終えるかもしれないということです。

当時祖母が入っていた老人病院のケースワーカーである石川愛人さんが、私のことを心配して下さり、時々お手紙を下さったりしていました。

この危惧を手紙に書いたところ、『おおよまと』一部が同封されたお返事を頂きました。石川さんの奥さんが、横浜の野本三吉さんと面識がおありで、このような少年がいるが、どうしたら良いかと相談して下さったそうです。親は私が目の届かないところへ行くことに反対しましたが、自分が回復するためにはそこへ行くしかない、私は逆に親を説得して大倭に連絡を取ってもらいました。

また、子供が二人出来たらどちらかに実家を継がせるという条件で結婚したということを以前母から聞いていたので、財産が皆無に等しい母方に養子に行くことを私は希望しました。長男だった私は、やはり長男である父と父の実家に反対されましたが、母も希望したためそれは決まり、出発の前日髪を切り、父に頼んで頭をつるつるに剃ってもらいました。

受け入れの窓口となつて下さったのは杉本順一さんでした。大倭到着の日から津田貢さんの住まわれるお部屋でご厄介になり、翌日から早速青山日元さんのお仕事の手伝いをさせて頂くことになりました。大人との付き合ひ方が無茶苦茶なため、日元さんから叱られながらも日々汗を流し、法主様、鈴月母さんと田畑のお仕事のお手伝いをさせて頂いたこともありました。会館の食堂での皆さんのお食事等、大倭の共同生活をさせて頂くうちに約一年が経ち、お陰さまでかなり回復することが出来ました。

同年代の友達を作つてはどうかという「交流の家」の飯河梨貴さんのお勧めもあり、自ら定時制高校に通いたいと申し出ました。それなら仕事は印刷に移つてはどうかと、杉本さんからお勧めがあり、それにも従わせて頂くことにし、今度は印刷の二階の青山法義さんのお部屋でご厄介になることになりました。

七年間も勤務させて頂いた大倭印刷には申し訳けなかつたですが、責任の重い仕事に就いてから辞めるより、今ならご迷惑も軽くて済むと思ひ退職させて頂き、永年お世話になつた大倭を離れることにしました。生の音楽に触れるという主目的でアジア各国を放浪し、帰国後、元菅原園勤務の平田弘之さんとのご縁で佐渡に渡りました。

この地でたまたま縁があり、その後結婚して息子を授かることが出来、離島の山の中で子供と接しているうちに思ったことがあります。

太平洋戦争で孤児となつた母親の「自分を良く見せたい」行為と、中東戦争による難民に対する爆撃により、二つの心の傷を受けてしまった私は、中学二年当時、校内暴力という形で母親と大人社

会に対する憤りを訴えていたのだと思います。

今はつきりしていることは、まず周囲の大人のしていることを子供なりに見て感じて感じながら私は成長してきたということ。次に戦争もテロも言い方が違うだけでどちらも関係ない人を巻き込んで新たな憎しみを生むということ。そして「親と学校に対する憤り」を、私はすぐに実行に移せる暴力という手段によつてでしか訴えることが出来ず、その矛先を向けた学校が被害に遭つてしまつたということです。子供と共に生活する私はこれらのことを忘れないようにしたいと思います。

近頃イスラム教が注目を集めているようですので、私が体験したことを最後に少しだけ書きます。

私は今までイスラム教徒が住む国々を歩いて数多くの人と接してきましたが、彼らは異教徒である私にもよく親切にしてくれました。彼らの祈りの中で「アラアは唯一の神である」という言葉があります。私の信仰を聞かれることはあつてもそれを批判されたりしたことは一度もありませんでした。口論はしよつちゅう見掛けませんが、殴り合いの喧嘩はほとんど見たことがありません。

ところが、イスラム教もしくはイスラム教徒に対して少しでも攻撃をするようなことがあると、彼らは団結し、一転して戦う信者と化します。ある時、パキスタンのペシャワールという都市で、暴徒と化した群衆がイスラム教シーア派の人が経営する映画館を襲撃しに向かう恐ろしい光景を、泊まつていたホテルの屋上から見たことがあります。シーア派がイスラム教スンニ派のモスク（回教寺院）で爆弾を爆破させたことへの報復だそう。軍か警察の放った催涙弾で私は涙が出ましたが、現場にいた人達はもっと苦しかったと思います。同じイスラム教徒同士でさえ、宗派が違えばこのようなことになるのです。

あじさい日誌

3月13・16日 栃木県のサヒ・るみ子さん来邑。交流の家泊。

3月15日 大倭神宮月次祭。

3月16日 ボランティアサークル「あじさいの箱」の懇親会が大倭会館で開かれ、施設での交流やチャリティサークルの歴史コースの講師、岡本幸安先生による「歴史に学ぶ」の講演などがありました。

3月17日 大倭会の第268回文化行事で大阪歴史博物館と難波宮跡へ。参加者19人と子供1人は最先端の建物で歴史ワールドに遊び、難波宮の大極殿跡でしばらく過ごしました。

3月23日 大倭大本宮月次祭。午後4時から大倭会館で大倭会役員会が開かれました。

3月29日 横浜市大生の永仮まゆりさんが妹(あづみさん)、学友の金田綾子さんとそのお母

大倭会第270回文化行事

熊野の玉置山

日帰りバス旅行で、玉置神社へ。樹齢千年の神代杉やシャクナゲを楽しみ新緑の一日を過ごす。

日時 平成14年5月19日(日)
8:15集合 8:30出発

集合場所 奈良国際ゴルフ場前
ルート (全行程バス)奈良大倭…十津川…玉置神社(昼食)…奈良大倭着(19時30分頃)

参加費 1人 3,000円
申込み 定員があるため参加は申込み順にします。

5月10日までに湯浅まで
電話 0742-48-3389
※雨天決行・弁当持参



さんと共に来邑、交流の家泊。永仮姉妹は4月1日まで滞在。3月30日 大倭会館で2月18日に帰幽された故我原芳子さんの五十日祭が行われました。3月31日 林修三さんの呼びかけで「和光祭」が開かれ、林さんの主宰する中国語塾の人々をはじめ大倭関係や色々な顔ぶれが、食べ物、踊り、音楽、書、歌謡と、邑を舞台上に遊ぶ一日を創り出しました。

この日、矢追明孝さん一家4人が完成した新居に引っ越し、邑の住人となりました。また昨年からの約9カ月、交流の家で暮らしていた山道ラウシさんが大阪長居に住むことになり引っ越ししました。

4月1日 大倭殖産(株)に宮田征宜さんが入社しました。

4月2日 群馬県安中市原市の新皇教宮、中村文太郎翁(90歳)が帰幽され、3日大倭流で言う前夜祭が、4日帰幽祭が行われました。中村家に新皇教宮ができた所以を思う時、文太郎翁のご苦労が偲ばれます。永い間ご苦勞様でした。

4月4日 昭和40年代初めの一時期、大倭で生活されたことのある歳森蔵さん(西宮市)が来邑、法王様はじめ知る人多くのお墓参りや、青山日元さんへご挨拶をされました。

4月6日 夜、大倭会館で邑倭の会が行われました。

4月7日 拝殿で紫鳳会の第三絃演奏会が今年も開かれ、200人も参加者がありました。開演前に「ヒトシオ タノシミ」と言ってこられた鈴月かあさんの言葉が心に残ります。昨年は共に現界でこの会を楽しんでもらったのですが…。(P)

また交流の家ではF I W Cのお花見に30人ほどが集合。

4月8日 大倭宮拝殿で午前11時から須佐緒祭の祭典が行われ、その後、拝殿の庇で恒例の園遊会を楽しみました。

早い桜の開花に、気をもんで騒いでいた昇ちゃんですが、結局はいくつもの催しに参加できました(そんなに花が好きとは知らなかった)。

4月10日 竹本良成君と矢追登美香ちゃん、富雄南小学校へ入学、嬉しい一年生となりました。オメデトウ!

大倭安宿苑では、3月20日 大倭墓地で、大倭安宿苑で帰幽された住苑者・職員

の慰霊祭が行われました。

3月29日 定年退職者5名の送別茶話会が行われ理事長が永年の勤務をねぎらわれました。

4月1日 主な人事異動では、須加宮寮長の岸田哲さんが法人事務局次長に、生駒善則さんが後任の寮長になりました。

新採用者は14名でした。伊藤アヤ子・渡邊詩美・野鹿洋子さんが一緒に職員住宅の雉子寮の一戸に入居されます。

3月29日 住苑者自治会主催で2人の退職職員に、涙あり笑いあり歌ありの送別会。沢口一子寮母は須加宮寮で約8年、一度退職して菅原園で26年余、お勤めでした。

(須加宮寮)
4月2日 西斎庭でお花見。天気にも恵まれお弁当やカラオケを楽しみました。

3月11日 30名のご出席を頂きボランティアの皆さんへ慰労会を行い、住苑者を代表して上田ご夫婦が花束を贈りました。(八重垣園)

3月24日 春まつり(交流会)で、家族や地域の方にもご参加頂いてパーティを催しました。

3月29日 大倭神宮にて。

5月6日(振替休日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第四〇二回視会
5月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿において。

*月次祭(大倭神宮)
5月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
5月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。

3月29日 住苑者自治会主催で2人の退職職員に、涙あり笑いあり歌ありの送別会。沢口一子寮母は須加宮寮で約8年、一度退職して菅原園で26年余、お勤めでした。

また交流の家ではF I W Cのお花見に30人ほどが集合。

4月8日 大倭宮拝殿で午前11時から須佐緒祭の祭典が行われ、その後、拝殿の庇で恒例の園遊会を楽しみました。

早い桜の開花に、気をもんで騒いでいた昇ちゃんですが、結局はいくつもの催しに参加できました(そんなに花が好きとは知らなかった)。

4月10日 竹本良成君と矢追登美香ちゃん、富雄南小学校へ入学、嬉しい一年生となりました。オメデトウ!

大倭安宿苑では、3月20日 大倭墓地で、大倭安宿苑で帰幽された住苑者・職員

の慰霊祭が行われました。

3月29日 定年退職者5名の送別茶話会が行われ理事長が永年の勤務をねぎらわれました。

4月1日 主な人事異動では、須加宮寮長の岸田哲さんが法人事務局次長に、生駒善則さんが後任の寮長になりました。

新採用者は14名でした。伊藤アヤ子・渡邊詩美・野鹿洋子さんが一緒に職員住宅の雉子寮の一戸に入居されます。

3月29日 住苑者自治会主催で2人の退職職員に、涙あり笑いあり歌ありの送別会。沢口一子寮母は須加宮寮で約8年、一度退職して菅原園で26年余、お勤めでした。

お知らせ

大倭紫陽花邑内を公道や公園のような気持で通り抜けられる状況が増えたため、一応、3月19日より須賀の道の出入口を

夜間 (pm 9:30~am 5:30)

閉めることになりました。その間、各自で開閉して下さい。

あんない

*月次祭(大倭神宮)

5月6日(振替休日) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭会主催第四〇二回視会
5月12日(日) 午後2時より大倭大本宮拝殿において。

*月次祭(大倭神宮)
5月15日(水) 午後2時より大倭神宮にて。

*月次祭(大倭大本宮)
5月23日(木) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。